

第2分科会

テーマ：LD、ADHDおよび自閉症等への支援の現状と課題

LD、ADHDおよび自閉症等のある子どもへの通級による支援 ～通常の学級との連携（A児の事例を通して）～

東京都江戸川区立下鎌田小学校教諭

有澤直人

1. 子どもの教育的ニーズの把握

①教育的ニーズを考える視点

(1) 子どもの「発達」の支援

- ・子どもの実態を一人一人の「発達」の全体像を考えて把握することが大事。その中で学校での支援の位置づけ、通級による指導の位置づけを考える。
→学習の支援

(2) 子どもの「生活」の支援

- ・子どもの生活全体の中で、学校生活の位置づけを考え、支援の方向を見きわめる。
→生活経験、対人関係、社会性の支援

②教育的ニーズの把握の方法と手順

- ・生育歴等の聞き取り（保護者、関係者）
- ・個別の行動観察（コミュニケーション能力、基礎的な学力、運動機能、行動特徴等の把握）
- ・集団場面での行動観察（対人関係、集団参加の状況、担任等関係者からの日常の行動の様子の聞き取りなど）
- ・諸検査（必要に応じて、心理検査、知能検査等の実施）

2. 教育課程の編成と個別の指導計画の作成

- ・実態の整理（情報の整理）
- ・課題の列挙
- ・指導目標の設定（短期の目標、長期の目標）
- ・指導内容の構成
- ・指導形態の選択
- ・指導の展開と評価

3. 通級による指導の展開

①個別指導の位置づけと内容

【A児の場合】

◇コミュニケーション能力を高めること、基礎的な概念を身に付けさせることがA児の知的発達を促し、学習能力を高めることになる。

◇友達や先生との多様な人間関係を経験させることが、対人関係の理解や、生活経験を豊かにし、興味関心を広げることにつながる。

【課題】

- ・集団での運動場面等を多く経験させ、すすんで体を動かして運動する習慣を身に付けさせる。
- ・助詞を使って文を言えたり書けたりできるようにする。等々

【目標】

- ・語彙を増やし言語表現力を高める。
- ・友達とコミュニケーションできるパターンを身に付けさせる。等々

- ・個々の課題（認知特性に応じた教科等の指導）
- ・行動のセルフコントロール
- ・運動（バランス、巧緻性、動作など）
- ・こだわり、行動パターンの修正、柔軟な思考の練習

②小集団指導の位置づけと内容

- ・対人的な行動（かかわり）のコントロール
- ・相手の立場に立った会話、共感、気持ちの理解
- ・集団場面の行動（ルールの遵守、勝敗の受け入れなど）
- ・役割の分担、協力
- ・常識的な判断

4. 連携による支援

①在籍校との連携

- ・通常の学級の中での具体的な配慮（障害の理解、教室環境の整備、座席の位置、適切な指示の出し方、日常の基本的な対応 等々）
- ・学習支援の方法（視覚的情報の提供の方法例、個別の課題の準備 等々）
- ・行事参加における具体的な支援の方法
- ・友達とのかかわり、対人関係、集団参加への援助
- ・問題の解決方法等の援助

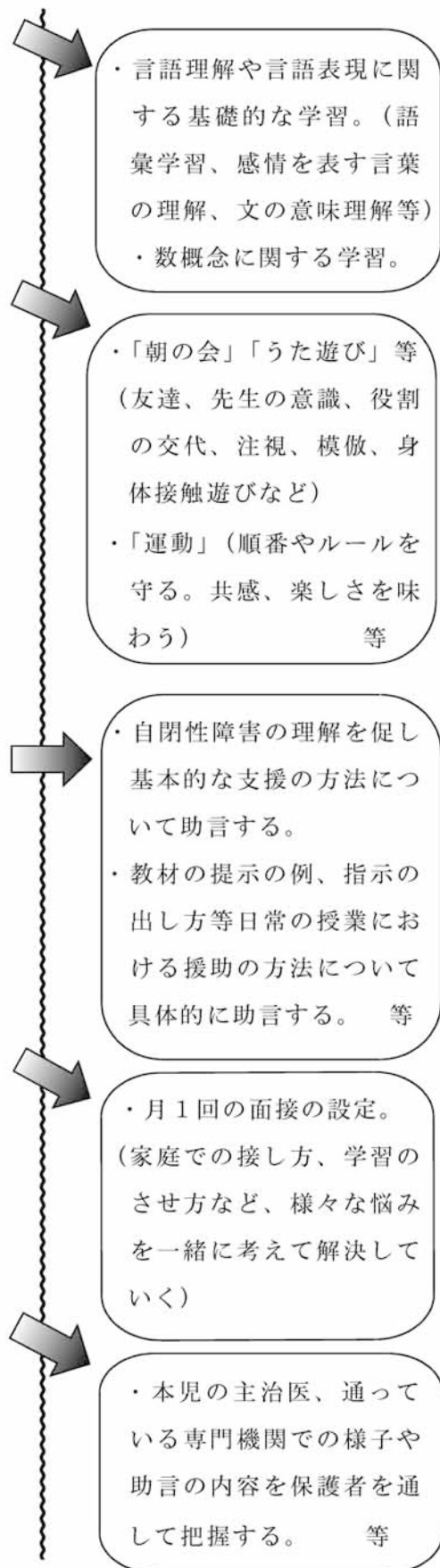
②保護者との連携

- ・保護者の願いの理解（指導計画への反映）
- ・障害の特性と実態の正しい理解と受容への援助
- ・子育ての悩み、苦しみ、不安への援助
- ・学校の支援、指導内容、方法等についての説明
- ・様々な情報提供

③関係機関との連携

- ・医師との連携（服薬のフィードバック、障害の理解、配慮と学校の役割）
- ・教育相談室との連携（役割の分担、情報交換など）
- ・その他の機関との連携

5. 特別支援教育に向けての課題



L D、A D H D および自閉症等のある子どもへの通常の学級における支援 ～通級児Aとのかかわり～

東京都江戸川区立下鎌田小学校教諭

白井恵子

1. A児について

- ・これまでの経過（出会い、理解）
- ・子どもの実態の把握（前担任や、通級学級の担任からの情報）

2. 通常の学級での支援

①基本的なかかわり方

【授業中】

- ・指示や説明をする場面で、必ず一番に声かけをする。
- ・注目すべき課題の場所を赤で示す。
- ・座席の場所の配慮
- ・授業への参加の支援。必ず一つの課題はやるように声をかける。（ほとんどの場合それ以上できる）

【休み時間、給食時等】

- ・様々な行動を言葉やアイコンタクトで承認したり、褒めたりすることで安心感を与える。

②学習場面での支援

- ・教科学習における配慮（国語、算数、体育、生活 等）
- ・行事（運動会、音楽会、マラソン大会 等）

③友だちとのかかわり

- ・学級の子どもたちのA児に対する理解
- ・当番の仕事（日直・掃除）
- ・休み時間

3. 保護者との連携

①連絡帳での情報交換

- ・不安なことや心配なことがあった時は伝えてもらい、日常のかかわりに生かす。
- ・授業内に終わらなかった課題について伝える。学校での様子を伝える。

②日常のコミュニケーション（気になったことがあれば、その都度話し合う。）

③年間計画の中での家庭訪問、個人面談

4. 通級指導学級との連携

①学期に1度の話し合い

（通級学級での様子を把握する。通常の学級での様子を伝える。支援の仕方を助言してもらう。）

②日常の情報交換（校内通級の利点を生かして）

秦野養護学校の地域支援の取組み

神奈川県立秦野養護学校教諭

高山 健一

1 秦野養護（病弱）養護学校の子どもたち

学部構成

【病弱教育課程】	【重度重複教育課程】	【かもめ学級】
小学部 国立療養所神奈川病院 or 通学 中学部 国立療養所神奈川病院 or 通学 高等部（在宅訪問教育）	小学部（通学・訪問） 国立療養所神奈川病院 中学部（通学・訪問） 国立療養所神奈川病院 高等部（施設訪問教育） 国立療養所神奈川病院	神奈川リハビリテーション病院内 （施設訪問教育） 小学部・中学部

2 秦野養護の地域支援 = 一般教育相談

内的要因

- ・病弱教育課程の子ども = 心理的なケアの必要な子ども → 教育相談の必要性
- ＝不登校経験のある子ども → 地域との連携の必要性

外的な要因

- ・新指導要領
- ・「21世紀の特殊教育の在り方について」(H13.1)
- ・「今後の特別支援教育のあり方について」

3 これまでの一般教育相談の経過と現状

	相談ケース	相談件数	1 ケースの平均回数
平成12年度（試行）	17	41	2.4回
平成13年度	23	90	3.9回
平成14年度	49	348	7.1回
平成15年度12月まで	(48)	(220)	(4.6回)

相談の主たる主訴（H15年度）

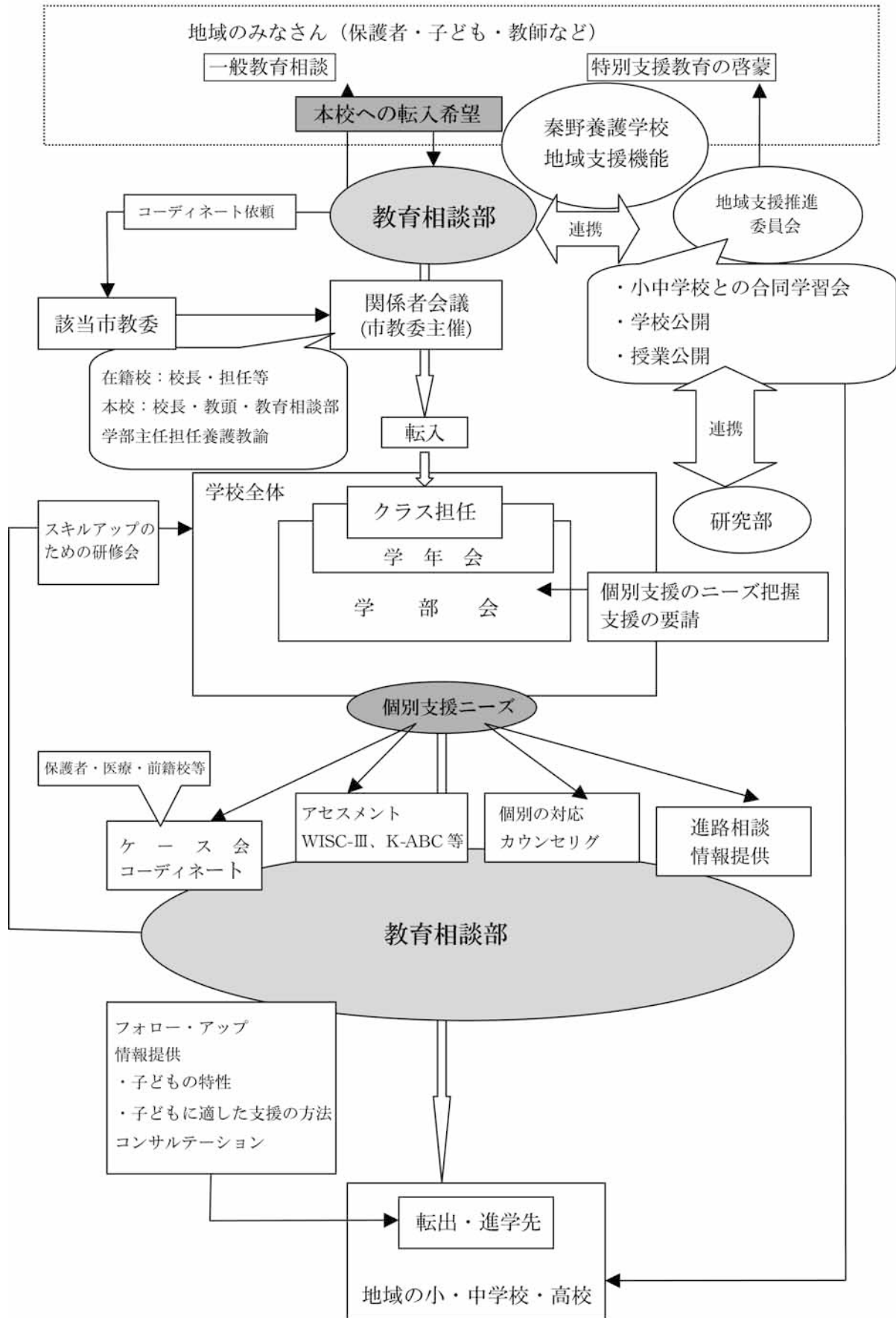
不登校17件、学習10件、行動10件、進路/情報9件、検査/見立て5件

4 今年度の事例から

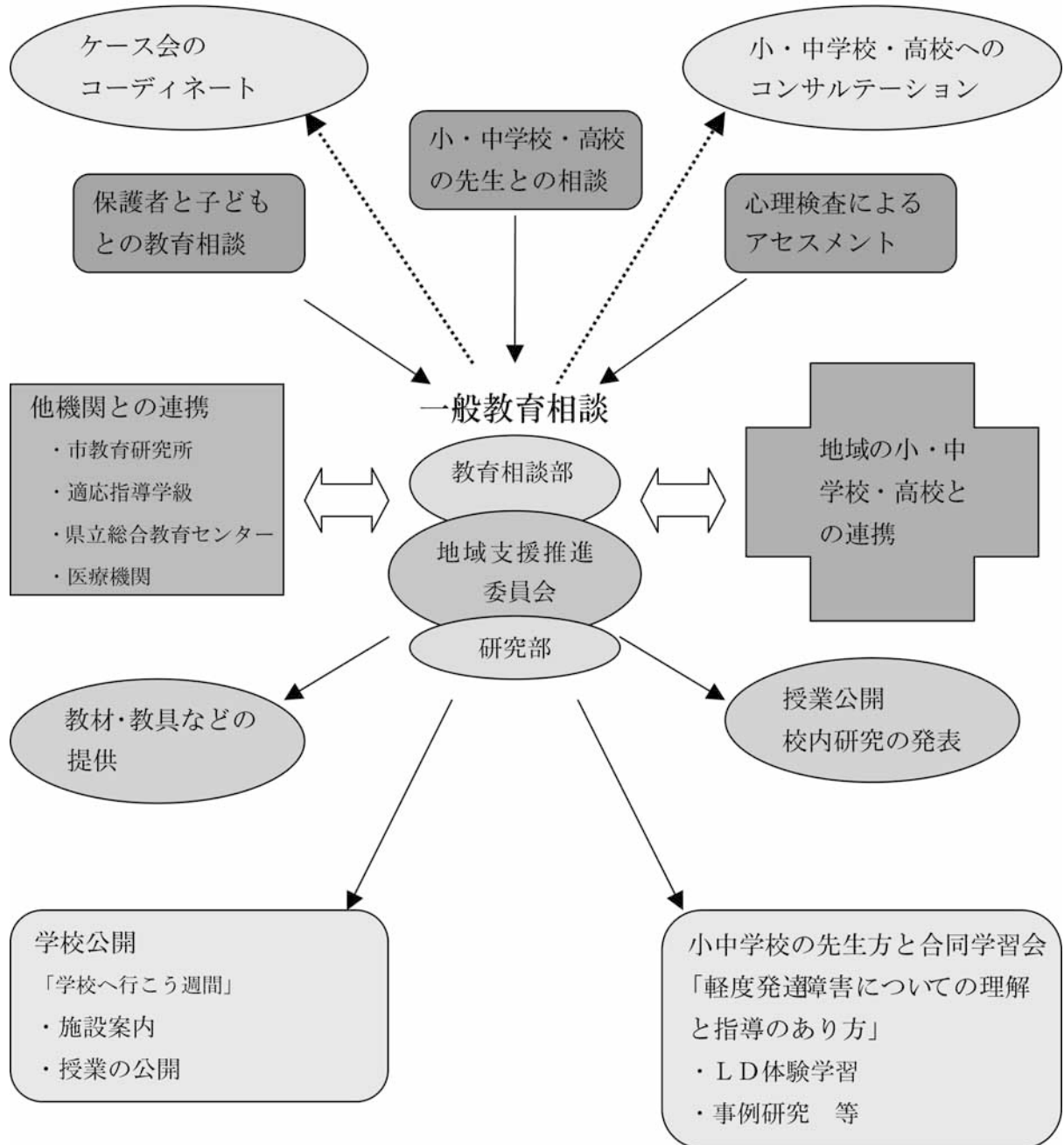
LDと診断された中学1年生のケース

- ・県立教育センターと小学校から中学入学に際して、支援の依頼
- ・養護学校の役割
 - ・小・中学校の連携の橋渡し
 - ・子どものアセスメント
 - ・子どもの学習面・心理面の支援
 - ・保護者の心理面の支援
 - ・中学校の先生方との相談・支援

秦野養護学校の個別の支援のための教育相談部の役割



秦野養護学校の地域支援の取組み



中学校におけるLD、ADHD、および自閉症等への支援の現状と課題

横須賀市立公郷中学校相談学級教諭

上級教育カウンセラー 川 端 久 詩

はじめに

横須賀市立公郷中学校相談学級について

不登校生徒の在籍校復帰と自立に向けての支援を対象にした情緒障害学級。在籍生徒を置き、市内各校から通級生徒を受け入れている併存方式。横須賀市内には中学校2校、小学校1校に設置されている。その他に適応指導教室1。

現在、在籍・通級生徒14名

(うちLD・ADHD・HA及び他軽度発達障害、その疑いのある生徒5名)

「不登校」は現象

さまざまな困難(例 内向的、人づきあいや世渡りの下手さ、学習の遅れ、神経症的症状、精神疾患、LD・ADHD・高機能自閉症等の軽度発達障害、その他の障害、など。例年約半数の生徒が通院加療中)により、いま起きている二次障害としての不登校。

「これでは不登校になってもあたりまえだな。」という困難と環境が整う。

SEN (Special Educational Needs) を有する。

相談学級通級開始後も、不登校調査にはカウントされ続ける。(不登校生徒扱い)。

LD、ADHD、高機能自閉症(HA)の子どもたちの発達段階に応じて変わる状態像

中学校段階での状態像の変化

発達の遅れ・・・遅れながらも自分なりの努力や学習をしている。

- 例
- ・漢字などの読み書きはある程度できるようになるが、ノートをとるのが遅い、字がきたない。一斉授業の説明ではわからない。(LD)
 - ・多動・衝動性は目立たなくなるが、授業中聞いてもいないのに勝手にどんどん発言する。(ADHD)
 - ・係活動など、個人で責任を持たなければならない仕事などができない。(HA)

・・・多動でなくなればADHDでなくなるわけではない

「どうしたらいいのか教えて。教えてくれたらぼくはわかる！」

これらに関する多くの中学校教師の認識

・・・勉強ができない。未学習。能力が低い。なまけている。

落ち着きがない。思慮分別がない。

話を通じない。何を考えているのかわからない。やる気がない。無気力。



「家庭のしつけ、養育の誤り・本人の性格によるもの」と考える。

- ・教師の未学習（研修の機会がない）と認識の低さ（LD・ADHD・HAの特性・支援方法がわからない）による誤介入。
- ・特例の許可は40人の集団を指導する場合の規範性の低下（あの子ばかりいつも優遇されてずらいなあ）を怖れる。自分のことは自分でしなさい。
（つらかったり、我慢したりしなければならないのはみんな同じ＝やればできるのだから、あなたも頑張りなさい。＝個別対応性の機能が効かない。

「頑張ってもできないぼくは、やっぱりダメな人間なんだ。」

- ・・・二次障害としての不登校・非行・問題行動等生徒指導上問題にあがる生徒の増加

診断があいまい

- ・医師・相談機関によって異なる診断（例 ADHDかHAか）
医療・相談機関からの情報が現場に生きる、わかりやすい情報であるか。
学校現場でどう判断し、支援につなげたらよいかわからない。
- ・学校では学校の教育的診断が必要
（その生徒の特性の理解と支援体制作りと具体的支援の方法策定と実際の運用後の再評価、見直しの繰り返し）が必要。

教師も保護者も本人も気がついていないケースの多さ

教育相談とも無縁の生徒の多さ・・・自分がLD等であることをわかっていないつらさ。

相談学級での支援

1 あたかな感情交流を通してひととの関わり方を学ぶ。

- ・調理実習・野外プログラム、(キャンプ) 演劇ワークショップの参加、文化祭・福祉施設での紙芝居・演劇上演
- ・構成的グループ・エンカウンター、ソーシャルスキルの実施

2 基礎的な学力を徐々に身につける。

相談学級での授業実施（通年で授業時間の設定）相談学級以外の教科教諭による。

今年度は保健体育、国語、数学、(以上週2時間) 社会、音楽、卓球(以上週1時間) で授業を実施。相談学級内での学習成績評価を行い、通級生徒の各在籍校に送付している。⇒不登校生徒の学習

成績評価の実施。

個別対応性を重視しながらも、同時に小集団から始めるあたたかな関係づくりの体験学習を基盤とする

「四十人の中の一人のあなた」⇒「たったひとりのあなた」

公郷中学校のとrikumi

- 1 相談学級（不登校）を知るための校内研修会開催
- 2 不登校生徒をださない「楽しい学校づくり」研修
 - ・ 構成的グループ・エンカウンターの実施（一時的支援）
 - ・ Q-U（学校生活満足度尺度）を用いた学級経営アセスメント（二次的支援）
 - ・ LD・ADHD・高機能自閉症の理解と支援の方法を学ぶ研修
 - ・ 不登校・その他の困難を持つ生徒への個別支援システム（三次的支援）
 - ・ 教科教諭が相談学級での授業を担当、在籍学級への復帰を支援する

課題

早期発見・早期対応・・・絶対に二次障害をださない。不登校、情緒・精神面など

- ① 自尊感情を高める支援・・・成功体験を積ませる。できたことをこまかく評価
「ほら、こうやればできたね。」
- ② 具体的・適切な指示・・・「ちゃんと掃除しろよ。」⇒「ここからここまで掃いて。」

小・中学校の連携・・・コツの共有 具体的な引き継ぎを

あの子には、こういう言い方、指示が入りやすい

告知・・・どう伝えるか タイミングと条件が必要

- ・ 親をも含めて支えてくれる人がいて、サポートする体制があること。
 - ・ ダメな人間なのではない。その困難さをカバーできればよいのだ。
- 「そうだったのか。それでいままでこんなにつらかったのか。」

